

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530145

研究課題名(和文) 初期近代イギリスにおける実践哲学の形成 政治的賢慮概念をめぐる

研究課題名(英文) The Formation of Practical Philosophy in Early Modern England: On the Concept of Political Prudence

研究代表者

岸本 広司 (KISHIMOTO, Hiroshi)

岡山大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：20186216

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、初期近代イギリスにおいて実践哲学がどのように形成されたかを、サー・ウィリアム・テンブルとハリファクス侯の政治的賢慮概念の分析を通して考察した。その結果、(1)テンブルは抽象的な政治理論を退け、経験と常識を基調とする穏健で賢明な統治のあり方を模索していたこと、(2)中庸と寛容を重視するテンブルの実践哲学は、教養形成期に基礎づけられていたこと、(3)テンブルの学問論や庭園論に、彼の政治的賢慮概念との密接な関連性を見とることができること、(4)日和見主義者を自認したハリファクスの思想には、テンブルと同様の貴族主義的な賢慮概念が豊かに包蔵されていたことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this research project, I studied the formation of practical philosophy in early modern England, while analyzing the concept of political prudence of Sir William Temple and the Marquis of Halifax. This study revealed the following four points. (1) Temple rejected abstract political theory and groped for a way of moderate and wise government which makes experience and common sense the keynote. (2) The practical philosophy of Temple, who attached great importance to moderation and tolerance, was based on the period of his cultural formation. (3) In the learning theory and garden theory of Temple, close relevance with the concept of his political prudence can be grasped. (4) In the thought of Halifax, who acknowledged himself to be a trimmer, the same aristocratic concept of political prudence as Temple was richly contained.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：初期近代イギリス 政治思想史 実践哲学 政治的賢慮 サー・ウィリアム・テンブル ハリファクス侯

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究者は、実践哲学 = 政治的賢慮の復権を長年の研究課題としてきた。まず 18 世紀イギリスの E・パークを取り上げ、パークの本質が政治的賢慮の実践であったことを明らかにした。次いで、近代イギリスの政党概念を分析し、政党とは賢慮の制度的具象化であったこと、またオーガスタン期に隆盛した J・スウィフトたちの諷刺も、民衆レベルでの賢慮の表現、すなわち、実践哲学の展開にほかならなかったことを明らかにした。

(2) 以上の研究成果から、イギリスで実践哲学の展開を明確に認めうるのは 18 世紀においてであるとしても、それはすでに近代の初めに形成されていたのではないかと、またその重要なファクターとなったのは、貴族たちの中庸の精神や常識、趣味・庭園様式など広義の美学思想であったのではないかとこの着想を得た。すなわち、17 世紀中葉から 18 世紀初頭の文人政治家たち、なかんずく、W・テンブルとハリファクス侯の政治理念には、貴族の教養に裏打ちされた賢慮概念が豊かに包蔵され、そこにはホブズたちの政治理論とは対照的な実践哲学の水脈が伏在しているのではないかと、そしてこうした観点からの研究を行う必要があるのではないかと考えるに至った。これが、本研究課題の申請時における背景・動機である。

2. 研究の目的

本研究は、初期近代イギリスにおいて実践哲学がどのように形成されたかを、ウィリアム・テンブル(1628-99)とハリファクス侯(1633-95)の政治的賢慮概念の分析を通して明らかにする。すなわち、倫理的・政治的叡智としての賢慮を実践哲学の要諦として捉えて、賢慮と中庸・経験・常識・趣味・庭園様式などとの連関性を、時代の歴史的コンテ

クストを重視しながら解明することを目的とする。本研究は、歴史的転換期にあった初期近代のイギリスにおいて、ホブズたちの科学主義的な政治理論とは異なる規範学としての実践哲学が形成されていたことを明らかにし、それを通して、イギリス政治思想史の再構成を図ろうとするものである。

3. 研究の方法

(1) 本研究課題を遂行するためには、テキストを正確に読解し、政治的言説を歴史的に解明する必要がある。そこでまず、第一次資料と関係図書の収集に努めた。具体的には、政治パンフレット・エッセイ・書簡・日記・回想録・議会議事録等の歴史的文書、政治思想史・政治史・美学史・庭園史等の関係図書である。

(2) 先行研究を整理して問題点を明確にするとともに、収集した資料を整理し、研究計画に従って読解していった。とりわけ、最も重要なテキストであるテンブルとハリファクス侯の著作を時代のコンテクストのなかで丹念に読解し、テンブルにあっては彼の賢慮概念の倫理的・政治的意味を探りながら、またハリファクスにあっては日和見主義の概念の分析を通して、初期近代イギリスにおける実践哲学の形成とその意義を考察した。

4. 研究成果

(1) イギリスで実践哲学が形成されたのは王政復古と名誉革命の両体制期においてであるが、まずこの時代の政治的・社会的・文化的特性を探り、賢慮に基づく政治が必要とされた条件を明らかにした。関連する先行研究としては、Geoffrey Holmes, *The Making of a Great Power*, 1993 ; Julian Hoppit, *A Land of Liberty? England, 2000* ; Kevin Sharpe, *Remapping Early Modern England*, 2000 などがあり、これらを参考にしながら考察を進めた。その結果、政治的不

安定さを内包していた両体制期は政治的賢慮が必要とされた時代であったこと、また、この時期の賢慮概念が後代のものとは異なる貴族主義的特質をもっていたことが明らかとなった。

(2) 次いで、本課題の主要な研究対象であるウィリアム・テンブルの实践哲学を考察した。テンブルは、貿易上のライバルであるオランダとの間で繰り返される戦争の愚を訴え、両国の真の敵はフランスであり、ルイ14世の専制主義と膨張政策を勢力均衡の観点から抑制することこそが、自由と平和を守る最善の方策であると説いた。そしてそのために、自ら外交官となってイギリス・オランダ、スウェーデンとの間で三国同盟を結ぶとともに、ヨーク公の娘メアリとオラニエ公ウィレムとの縁組を成立させて、オランダとの関係を密にした。彼の外交論はヨーロッパの国際関係を広い視点から捉えたうえで展開されており、フランスに対する警戒はのちのイギリス外交の基本となった。また国内では、国王の絶対主義と民主的アナーキーを否定して両者の中間をとり、国王と議会の宥和を図るために枢密院の改革を進めた。

こうしたテンブルの政治行動に見られるのは、力による威圧外交でも、ホップズにおけるような幾何学的推論に基づく抽象的な政治理論でもなく、経験と常識を基調とする穏健で中庸を得た賢慮の政治である。しかもその政治は、貴族的精神と美意識によって裏づけられている。テンブルの政治的著作である *Observations upon the United Provinces of the Netherlands*, 1672 ; *An Essay upon the Original and Nature of Government*, 1672 ; *Upon the Conjecture of Affairs*, 1673 を詳細に分析した結果、以上の事柄が明らかとなった。

(3) 次いで、テンブルの賢慮の政治、すなわち实践哲学がどのように形成されたかを

教養形成期に焦点を絞って考察した。考察の結果は以下のとおりである。

第一に、テンブルは少年時代に聖職者である叔父ヘンリ・ハモンドから宗教的・道徳的訓育を受けるとともに、音楽への趣味を育てられている。人びとの尊敬を集めていたハモンドの教育は、テンブルの人格形成に大きな影響を与えた。第二に、グラマー・スクールでギリシア語とラテン語を習得し、古典の知識を涵養しているが、それらは外交官に求められる知的教養の源となった。第三に、テンブルはケンブリッジ大学のエマニュエル・カレッジで、ケンブリッジ・プラトニストとして著名なラルフ・カドワースの指導を受けている。信仰と理性の調和、ホップズ批判、宗教的寛容を主たる特徴とするカドワースの思想は、テンブルの实践哲学におけるリベラルな諸理念と基本的に同じである。彼はカドワースから多大な影響を受けながら自らの思想を形成していたと考えられる。第四に、テンブルは青年期に大陸旅行を行っている。この旅行から、宮廷社会における振る舞い方や礼儀作法の修養、外国語の習得、ヨーロッパ諸国の文化・芸術・習俗・社会制度の見聞等々、さまざまなものを得ている。それらは、上流階級のマナーや教養のみならず、倫理的・政治的叡智としての賢慮を身につけていく絶好の機会となった。最後に、大陸旅行中に知り合ったドロシー・オズボーンとのロマンスは、テンブルに感性や文学的想像力の重要性を認識させた。そしてそれは、彼の人間性の涵養や賢慮の形成に大いに資するものとなった。

(4) テンブルは、モンテーニュに倣って多くのエッセイを書いている。それらのテーマは多岐にわたるが、彼の实践哲学や政治的賢慮概念をより深く理解するためには、人間や社会についての思索の数々を書きとめたエッセイを分析する必要がある。とりわけ重要なのは、Of

Popular Discontents, n.d.; *An Essay upon Ancient and Modern Learning*, n.d および *Upon the Gardens of Epicurus*, 1685 である。

Of Popular Discontents は、民衆の不満はどのようにして生じるのか、またそれを解消するためにはどのようにすればよいのかについて、人間本性への洞察に基づいて論じたものである。テンブルによれば、不満の原因は心の不安にある。不安とそれに起因する落ち着きのなさが、人びとにさまざまな不平を、そして国家にあっては政治的対立や騒擾をもたらす。これは普遍的な現象であり、いかなる政体にあっても避けることができない。人間の本性がこのようなのだとすれば、欠陥なき完璧な理想国家などありえず、それゆえ政治をめぐる議論は、真理を目指す抽象的な理論よりも、穏健で賢明な良き統治のあり方の探究でなければならない。そしてここに、テンブルが政治における賢慮の重要性を認識していたひとつの根拠がある。

An Essay upon Ancient and Modern Learning は、古代と近代の学問の優劣について論じたものである。テンブルは近代の学問に対して批判的であった。とりわけ実証科学に対しては強い懐疑の念を抱いていた。人間が時代とともに進歩してきたことをテンブルも認める。しかし彼によれば、人間にとって真に重要な知識の多くはすでに古代に発見されており、近代人が付け加えたものはわずかである。近代の人間は古代の優れた学問に敬意を払うべきであり、そこからさまざまなものを学び取るべきである。しかるに近代人は知的傲慢に陥り、人生や政治の諸問題を有効に解決しえなくなっている。テンブルは、近代の所産に対して一貫して批判的な態度をとった。そして近代の問題性を古典的思惟で克服しようとしたが、われわれはここにテンブルの実践哲学のモーメントを見てとることができる。

Upon the Gardens of Epicurus は、庭園が人間の精神にいかにか大きな慰安と喜びを与えるものであるかを説いて、庭園趣味がどのように推

移してきたかを古代から跡づけながら、庭の作り方や世話の仕方、理想の庭園とはどのようなものであるかについて論じたものである。このエッセイでテンブルは、当時一般的であった幾何学的規則性が作り出す整形式庭園様式ではなく、自然に従い、不規則性と想像力による美の可能性を秘めた風景式庭園様式を称揚している。彼の理想とした庭園は、それまで庭を取り囲んでいた壁を取り払い、外部に広がる自然と一体化した庭園である。それは、庭を秩序づけていた規則性を排除し、各部分は調和しないものの、全体としては均整のとれた、不規則性の上に成り立つ美を実現した庭園である。ここに、硬直した理性の支配と厳格な規則を尊ぶ時代の風潮を退け、柔軟な思考と美的なるものを包摂するテンブルの賢慮概念との関連性を見て取ることができる。またここに、趣味の変容と閉ざされた庭園から開かれた庭園へという、貴族的美意識と結びついたテンブルの実践哲学の特質を把握することができるのである。

(5) 以上のテンブル研究の成果を踏まえて、彼の同時代人であるハリファクス侯の実践哲学を考察した。

ハリファクスが政界で活躍したのは、王政復古体制期に審査法や王位継承排除法をめぐる国王と議会が対立した時期、とりわけ、排除問題が起こったときに党派が誕生し、「排除派」(ウィッグ)と「嫌悪派」(トーリ)が激しい党争を繰り返した結果、王政復古によって回復されたはずの国民の和合と秩序が危機に瀕した時期である。このような状況下で政権の中核にあったハリファクスは、*A Letter to a Dissenter*, 1687; *The Character of a Trimmer*, 1688; *The Anatomy of an Equivalent*, 1688 など、混乱する政局を收拾するため幾つかの政治的パンフレットを書いた。そのなかでもとりわけ重要なのは、*The Character of a Trimmer* である。

このパンフレットでハリファクスは、「日

和見主義者」(Trimmer)と自称して、政敵からの非難に対して自らの政治姿勢を弁護した。この場合の日和見主義とは、原理原則を欠いて形勢を見ながら有利な方につこうとする、いわゆる機会主義やオポチュニズム、あるいは便宜主義やご都合主義ではない。むしろハリファクスの言う日和見主義とは、宗教的・政治的対立が激化するなかで、硬直した独善的思考や思慮なき熱狂に陥ることを戒めつつ、あえて節度ある中道の道をとろうとするものである。彼は国王の専制に抵抗する一方、扇動家にあおられた大衆の興奮や暴走を嫌悪し、良識ある貴族に主導された制限君主制を説いた。また党派間の激しい抗争において、柔軟で均衡のとれた調停役を引き受けた。彼は法の遵守を強調し、宗教においては寛容政策を主張する。また政治的原理主義や急進主義を退けつつ、宥和と待機の政治を訴える。こうした政治姿勢こそが、ハリファクスの言う日和見主義である。そしてそれ自体、政治的賢慮の別名にほかならなかった。

たしかに、ハリファクスの政治は急激な変化を嫌い、妥協を旨とする保守政治である。また党争を嫌うあまり、政党政治はもとより党派組織に何の価値も見出すことができなかった。しかし彼の経験主義的で中道主義的な精神は、テンブルと同様、貴族的な教養や趣味に彩られた賢慮の政治、すなわち実践哲学と言い得るものであった。かくしてわれわれは、テンブルとハリファクスに代表される初期近代のイギリスに、実践哲学の形成を見て取ることができる。そして彼らの思想は、ロバート・ハーリのマネージメントの政治に受け継がれ、やがてエドマンド・パークの政治哲学へと継承されていくのである。

(6) 初期近代イギリス、とくにテンブルやハリファクスにおける実践哲学の形成に関する研究は、わが国はもとより諸外国においてもほとんどない。また、趣味論や庭園論など美

学思想との関連のもとで論じられることもなかった。本研究は、イギリス政治史や美学史等に関する最新の研究成果を取り入れながら、いまだ手のつけられていない主題を解明しようとしたものである。その際、政治的言説をめぐる欧米の新しい研究方法を援用して、テンブルとハリファクスのテキストを丹念に読解した。そして倫理的・政治的叡智としての賢慮概念を析出し、歴史に埋もれていた彼らの実践哲学を掘り起こしていった。これは、ともすれば自然法思想や自由主義思想などの解明に偏り、その枠組みに入りきらない異質な思想を見落としてきたこれまでの研究に問い直しを迫るものである。本研究は、イギリス政治思想史の再解釈と再構成に繋がる可能性を秘めたものであり、ここに本研究の特色と意義がある。

今後の課題は、本研究の成果を踏まえながら、近代イギリスの実践哲学が共和主義やパトリオティズムとどのような関係性を有するのか、また帝国主義や植民地主義に対していかなるスタンスをとり、実際の政治にどのような影響を及ぼしたのかを、歴史的コンテキストを重視しながら政治思想史的に解明することである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

岸本広司、ウィリアム・テンブルとドロシー・オズボーン、岡山大学大学院教育学研究科研究集録、査読無、153号、17-27

bgeou_153_017_027.pdf

岸本広司、教養形成期のウィリアム・テンブル、岡山大学法学会雑誌、査読無、62巻1号、2012、1-32

olj_062_1_001_032.pdf

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岸本 広司 (KISHIMOTO, Hiroshi)
岡山大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：20186216